

上田市文化財調査報告書第79集

平成10年度

高田遺跡 III

共同住宅建設に伴う第3次高田遺跡緊急発掘調査報告書

1999. 3

上田市教育委員会

上田市文化財調査報告書第79集

平成10年度

高田遺跡 III

共同住宅建設に伴う第3次高田遺跡緊急発掘調査報告書

1999. 3

上田市教育委員会

序

長野県東信地方に位置する上田市は、東は烏帽子岳、南に独鈷山、西に夫神岳、北は太郎山に囲まれた、典型的な盆地を形成しています。また、その盆地の中央を千曲川が北西に向かって流れ、自然の美しさを私たちに楽しませてくれます。

上田は、古くから東信地方の中心として、その役割を果してきたと考えられています。古代には、信濃国分寺が置かれ、信濃国府も置かれていたと推定されています。中世では、塩田平を中心とする学術・芸術が花開き、国宝安楽寺八角三重塔や重要文化財前山寺三重塔・中禅寺薬師堂など日本を代表する建造物も建てられました。その背景には、鎌倉幕府と深い関わりのある塩田北条氏の存在があり、信濃の政治の中心地でもあったと考えられています。近世においては、真田氏が現在の上田の中心に上田城を築き、その城下町として発展しました。近代に入ると「蚕都」と呼ばれ、上田縞や上田紬の産地として栄えました。

現在上田市は、上信越自動車道・北陸新幹線の開通で高速交通網の整備が進み、平成11年には千曲川に(仮称)上田新橋、(仮称)上田大橋の完成が予定されています。

また、平成11年は、上田市制施行80周年を迎える記念すべき年であり、平成10年11月上田市中央部に「池波正太郎真田太平記館」が開館するなど、政治・経済・文化の新たな展開、試みが盛んに行われ、上田市のさらなる発展が期待されています。

このたび、上田市大字小泉において、共同住宅建設に伴う高田遺跡緊急発掘調査が行われました。高田遺跡は、平成2年には場整備に伴う発掘調査が、平成5年には共同住宅建設に伴う発掘調査が行われています。この2回にわたる発掘調査では、奈良時代から平安時代にかけての竪穴式住居址などが確認され、土師器・須恵器の良好な土器類や布目痕のある平瓦も出土しています。今回の発掘調査でも、前2回の発掘調査と同時期の竪穴式住居址・掘立柱建物址などが確認され、高田遺跡が規模の大きな集落跡であることが明らかになりました。

埋蔵文化財とは、先人達の生活や習慣、文化までも知ることのできる貴重な情報源であり、私たちや子供たちの生涯学習で活用される大切な資料となります。

また、埋蔵文化財を「記録保存」という方法でしか残せない場合、その貴重な資料を、皆様に広くお伝えし活用していただくとともに、後世にも伝えていかなければならない財産と考えております。

最後になりましたが、発掘作業に従事していただいた皆様と、第2次及び第3次高田遺跡発掘調査に際し、御理解、御協力をいただいた小泉寛見様に心より感謝申し上げます。

平成11年3月

上田市教育委員会教育長 我妻忠夫

例 言

- 1 本書は、長野県上田市大字小泉字古仁反田における、共同住宅建設に伴う第3次高田遺跡緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査は、長野県上田市大字小泉1459番地2小泉寛見氏から委託を受け、上田市が直営で行い、調査に要した費用は全て小泉寛見氏が負担した。なお、事務局は上田市教育委員会事務局文化課が担当した。
- 3 現地調査は、1998年11月4日から1998年11月16日まで実施し、引き続き1999年3月25日まで整理・報告書作成作業を行った。
- 4 遺構の実測は、清水彰・大井敬子・井沢光子・山本万里が行った。
- 5 遺物の洗浄・注記・接合・実測・トレース・版組は、西澤和浩・清水が行った。
- 6 遺構写真の撮影は清水が行い、遺物写真の撮影は西澤が行った。
- 7 現地調査の基準点測量とメッシュ杭打は、小笠原正が行った。
- 8 本調査に係る資料は、上田市信濃国分寺資料館に保管してある。
- 9 本書の編集・刊行は、上田市教育委員会事務局文化課が行った。
- 10 本調査の体制は次のとおりである。

教 育 長	我妻 忠夫
教 育 次 長	宮下 明彦
文 化 課 長	川上 元
文化財係長	岡田 洋一(平成10年4月30日退任)
〃	細川 修(平成10年5月1日着任)
文化財係職員	中澤徳士、尾見智志、塩崎幸夫、久保田敦子、久保田 浩、 西澤和浩、山崎敦子(平成10年4月1日着任)(担当)、 清水 彰(担当)、小笠原 正、望月貴弘、古野明子、松野ひろみ、 須齋千恵子(平成10年4月1日着任)
- 11 調査に参加・協力していただいた方々(順不同・敬称略)
(現地調査) 池田市郎、井沢光子、大井敬子、甲田五夫、成沢 伯、西澤 勝、山本万里

凡 例

遺 構

- 1 遺構は、()内に示す略記号で表し、続く番号は任意である。
竪穴住居址(SB-)、掘立柱建物址(ST-)、溝址(SD-)、土壙(SK-)、ピット(P-)
- 2 遺構の図版は、原則として国家座標による真北を頁の上としたが、紙面の都合により例外もある。その際には、その方位を示した。
- 3 遺構実測図は、竪穴住居址・掘立柱建物址・土壙は原図1:20・縮尺1:3、溝址は1:20・縮尺1:6を原則とした。なお、必要に応じて1:10・縮尺1:3とした。
- 4 竪穴住居址の主軸方向は、国家座標の真北と住居址の中軸線とのなす角度で示した。
- 5 掘立柱建物址の主軸方向は、国家座標の真北と建物址の中軸線とのなす角度で示した。
- 6 土壙・ピットの規模は、(長軸×短軸×検出面からの深さ)で示した。
- 7 標高の単位は、全て「m」である。
- 8 遺構図中の網点は、焼土を示す。
- 9 遺構写真の縮小は、任意である。

遺 物

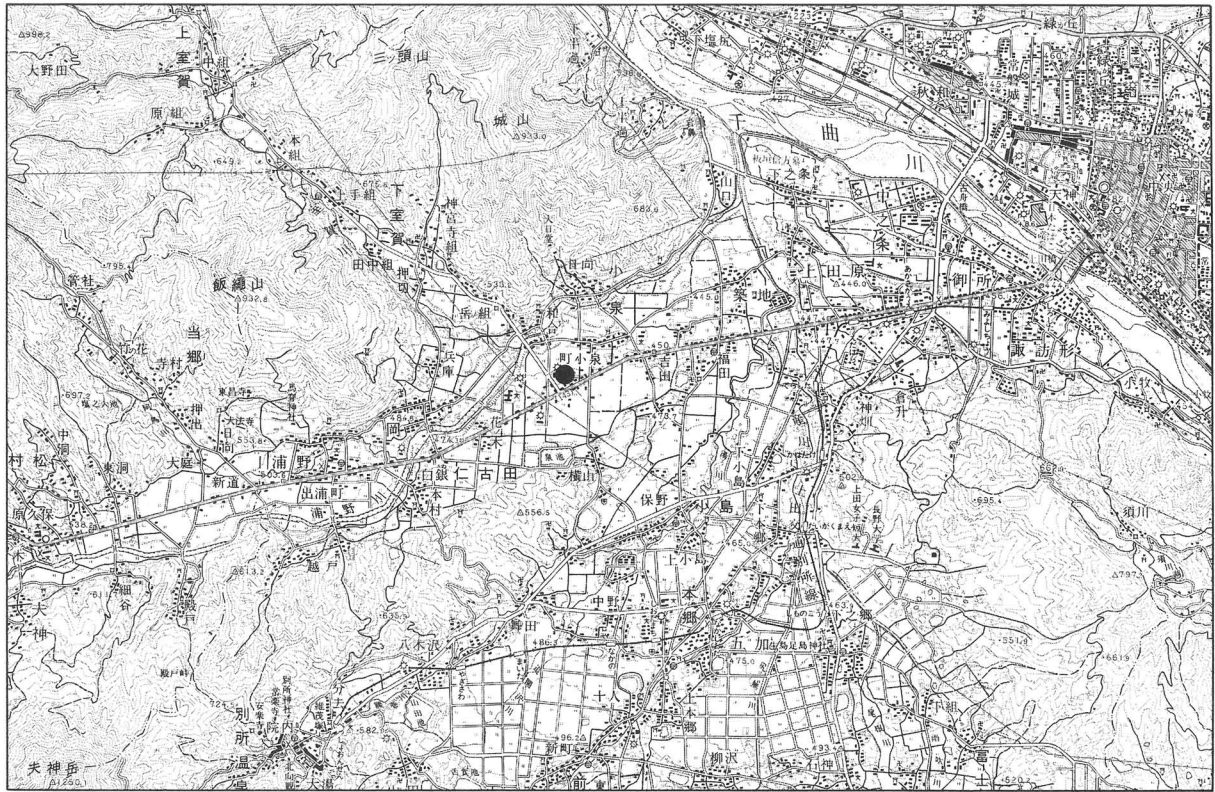
- 1 遺物実測図は、原図1:1・縮小1:3を原則とした。
- 2 土器の実測方法は、右1/2に断面・内面、左1/2に外面を記録する4分割法を原則とし、必要に応じてその率を変えた。
- 3 遺物実測図中の網点は、黒色処理を示す。
- 4 出土遺物一覧表の法量は、上から口径・残高・底径あるいは裾径を示す。同表中の器質は、胎土を「胎」、焼成を「焼」、色調を「色」とした。なお、色調は遺物の内面・外面を、基本的な色調を『新版標準土色帳』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修 1997年版)を用いて判別した。
- 5 遺物写真の縮小は、任意である。

目 次

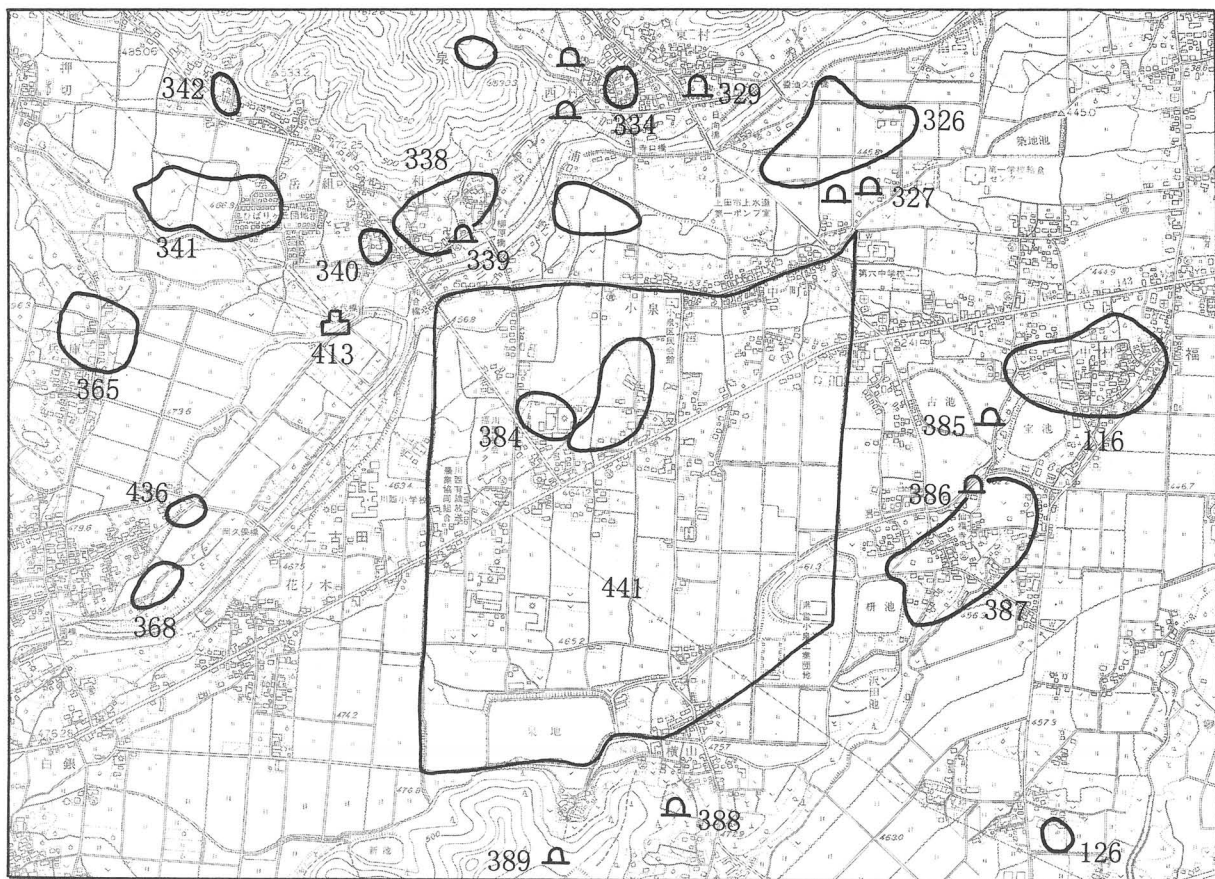
序	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
例 言	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
凡 例	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
目 次	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3
高田遺跡周辺遺跡一覧表	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3
高田遺跡遺構配置図	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5
第一章	序 説	7
	第 1 節 調査の経過	7
	第 2 節 調査の方法	7
	第 3 節 調査日誌	7
第二章	環 境	7
	第 1 節 自然的環境	7
	第 2 節 歴史的環境	8
	第 3 節 遺跡の基本層序	9
第三章	調査の結果	9
	第 1 節 概要	9
	第 2 節 遺構実測図	10
	第 3 節 遺物実測図及び観察表	16
写真図版	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	18
報告書抄録	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	19

＜高田遺跡 周辺遺跡一覧表＞

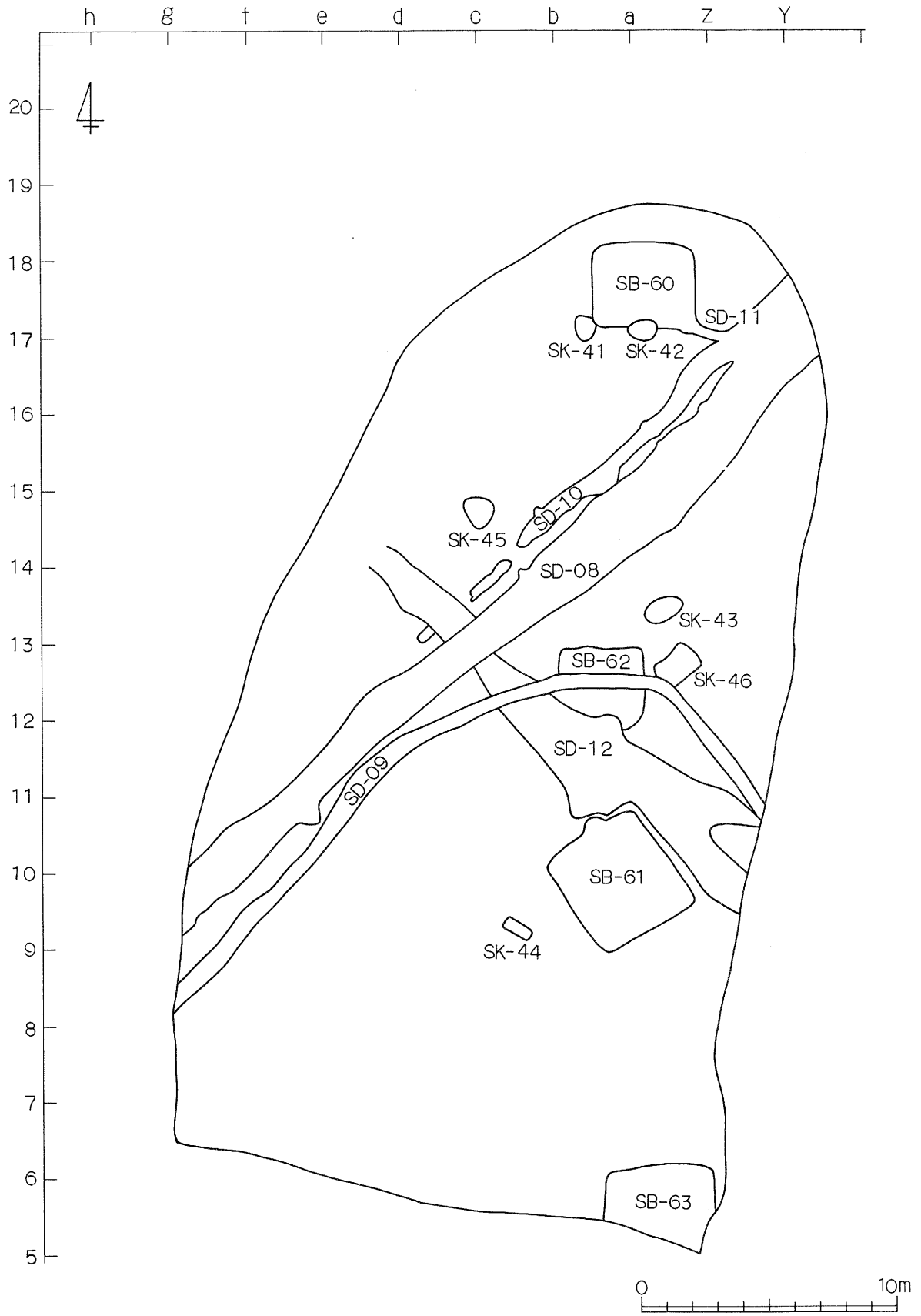
番号	遺 跡 名	時 代	備 考	番号	遺 跡 名	時 代	備 考
116	東村遺跡	古墳～平安		342	岳之本遺跡	平 安	
126	青木遺跡	弥生～平安		365	原遺跡	縄文・平安	
326	琵琶塚遺跡	弥生～平安	S61・62年度調査	368	久保遺跡	平 安	
327	琵琶塚古墳	古 墳		383	高田遺跡	古墳・奈良～平安	H2・5年度調査
329	日向小泉2号古墳	古 墳		384	長谷田遺跡	弥 生	
330	日向小泉3号古墳	古 墳		385	扇田遺跡	古 墳	
334	旗鉢遺跡	縄文～平安		386	東村経塚	近 世	
335	鍛冶山古墳	古 墳		387	原田遺跡	平 安	
336	鍛冶山遺跡	弥 生		388	口明塚遺跡	古 墳	
337	大道下遺跡	縄文～平安	H3年度調査	389	富士塚古墳	古 墳	
338	和合遺跡	縄文～平安		413	山崎城跡	近 世	S54年度調査
339	將軍塚古墳	古 墳		436	山崎遺跡	平 安	S54年度調査
340	岳之里遺跡	平 安		441	小泉条里水田跡遺跡	弥生～平安	
341	岳之鼻遺跡	縄文～平安	H3・4年度調査				



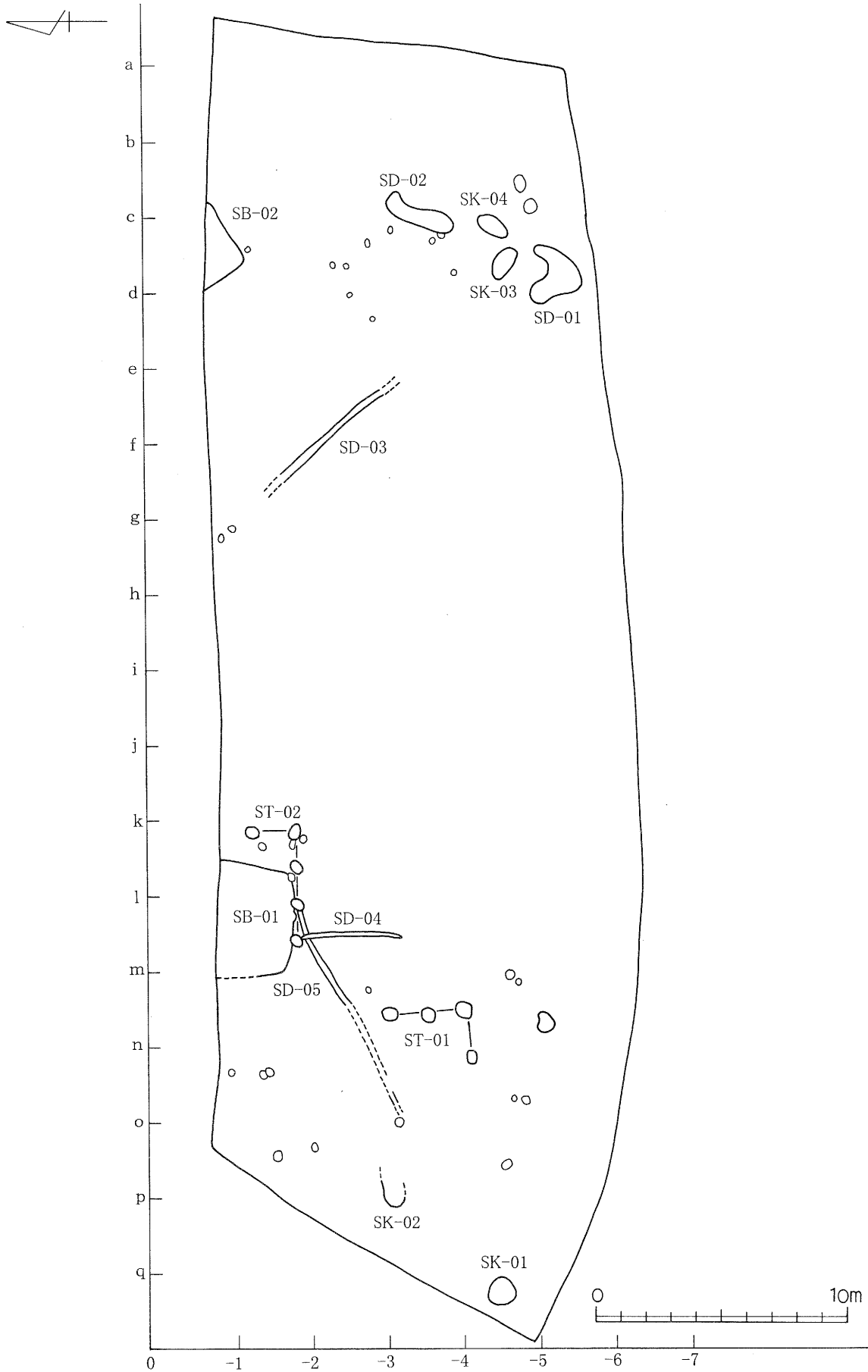
< 高田遺跡位置図 >



< 周辺遺跡一覽図 >



< 第 2 次 発 掘 調 査 遺 構 配 置 図 >



< 第 3 次 発 掘 調 査 遺 構 配 置 図 >

第一章 序 説

第1節 調査の経過

平成10年7月16日付開発事業届により、長野県上田市大字小泉1459番地2在住の小泉寛見氏から上田市へ、上田市大字小泉字古仁反田766番地2において共同住宅建設を行うとの届出があった。平成10年7月28日現地調査を行った結果、高田遺跡の範囲内に該当していることを確認した。そこで、小泉氏と埋蔵文化財保護協議を行い、平成10年8月28日試掘調査を実施した。その結果、開発面積2,817.62㎡のうち約750㎡において埋蔵文化財が確認された。平成10年10月15日、上田市と小泉氏の間で発掘調査の委託契約が締結され、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。

上田市教育委員会事務局文化課では、平成10年11月4日から11月16日まで現地調査を行った。その後、整理作業を行い、平成11年3月25日に本報告書を刊行し全ての調査を終了した。

第2節 調査の方法

本遺跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地であり、『上田市文化財分布図』（1996年7月1日上田市教育委員会）記載の、「高田遺跡」と同一である。高田遺跡では、平成2年度及び5年度の2回にわたり発掘調査を実施しているため、今回は、高田遺跡第3次発掘調査とした。これに伴い、T a - K a - D a の「TKD」と、第3次発掘調査を表すローマ数字「Ⅲ」を組合せた「TKDⅢ」を、本遺跡の略記号として使用した。

調査にあたっては、バックホーにより表土剥を行い、その後の遺構検出・堀上作業を人力により行った。調査区域内には、3×3mのメッシュを設定し、遺構の測量・遺物の取上げ等に利用した。メッシュの設定は、平成2年度の発掘調査に準じて行った。この基準点0の座標値は、X=42,444.000、Y=-27,636.000(第Ⅷ量系)、標高461.555mである。

第3節 調査日誌

平成10年	11月 4日(水)	機材搬入、バックホーによる表土剥開始
	11月 6日(金)	表土剥終了、遺構検出及び堀上作業開始
	11月10日(火)	基準点及びメッシュ設定作業
	11月16日(月)	遺構堀上終了、遺構測量、機材撤収

以後、埋蔵文化財整理室において整理作業を実施し、平成11年3月25日に報告書の刊行を行い、全ての発掘調査を終了した。

第二章 環 境

第1節 自然的環境

長野県上田市大字小泉は上田市の南西部に位置し、塩田地区と川西地区に二分される。塩田地区が、盆地性で塩田平と呼ばれているのに対し、川西地区は浦野川が形成した谷平野と室賀谷を中心として形成される地区である。浦野川は、上田小泉地方では依田川・神川に次ぐ一級河川で、小泉郡青木村の大明神岳(1,232m)、二ツ石岳(1,535m)、御鷹山(1,623m)、大沢山(1,440m)、子檀嶺岳(1,223m)などを源とする相染川、宮渕川、滝川、田沢川などを集めながら東北流し、中流域で阿鳥川・室賀川が合流し、下流域に至ってさらに産川を合流して上田市下之条で千曲川に注ぐ。上流域の青木村沓掛あたりで既に谷平野

を形成し始め、その幅は青木村中心部付近で約400m、上田市浦野で約900m、上田市吉田で約1,000mをはかる。また、河岸段丘も良く発達し、中下流域では2段を認めることができる。

今回の調査地は、浦野川が形成した谷平野の最も幅の広い地帯で、浦野川が北寄り山麓沿いに流れる谷平野中央部に位置する。一帯は谷平野といっても、西から東へ、また南から北へ緩やかな傾斜をなしている。北側に長野県指定天然記念物岩鼻から三ツ頭山(922m)につらなる城山(933m)の山塊が屹立して北風を遮り、また南側には塩田平と画する丘陵状の小尾根が存在するのみで、日照りは良好で温暖、その上、全国でも有数の寡雨地帯であるため、浦野川以外に水害の危険も少なく、自然災害は考えにくい安定した生活環境であると言える。

高田遺跡は、この緩斜面の約7,000㎡にわたって広がり、標高は約450mをはかる。

第2節 歴史的環境

浦野川流域で発見されたもっとも古い遺跡は、約7,000年前の縄文時代早期後葉茅山式期の土器を出土した、室賀谷の谷鬼(やぎ)遺跡である。縄文時代は、その後の全期を通じて遺跡が確認されているが、中期後後半に最も増加し、後晩期には減少する。高田遺跡の北方約600mに、平成元年に発掘調査を行った縄文中期後半から後期前半にかけての4件の敷石住居址や2基の石棺墓などが検出された大道下遺跡があり、西南西約2.5kmには昭和55年の発掘調査で縄文後期後葉加曾利B式期から晩期中葉大洞C2式期の遺物を出土し、上田市内では数少ない該期遺跡の中でも良好な遺物を出土した下前沖遺跡がある。

弥生時代の遺跡としては、青木村を含め十数の遺跡を数えるだけであり、それも後期後葉箱清水式期の小遺跡が多い。高田遺跡の東北方約500mの琵琶塚遺跡は1986・87年の2ヶ年にわたり発掘調査が行われ、23件の竪穴式住居址が検出された遺跡である。1989年に発掘調査された大道下遺跡からも該期住居址が検出され、浦野川の右岸河岸段丘崖沿いの遺跡の存在が確認された。琵琶塚遺跡からは、東海地方西部に中心をもつS字口縁台付甕が出土しており、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡としても重要である。また、北陸地方の影響を受けた土器もかなりの量で出土した。

古墳時代の遺跡は、古墳の数に比べて不明確な部分が多い。湮滅したものも含め19基を数える古墳のうち、室賀谷の神宮寺古墳、青木村の塚穴古墳が調査された。ともに両袖式の横穴式石室をもつが、前者は直線的な羽子板型石室で後者は胴張りの石室を有する。特に後者の副葬品には勾玉・切子玉・ガラス小玉・耳環等の装身具が出土している。西北方約500mの和合将軍塚古墳は礫槨をもつ竪穴式石室と推測され、かつて鉄剣2口が出土したと伝える。北方約700mの日向小泉には日向小泉1～5号墳など6基の円墳が存在し、当地区唯一の群集墳が存在している。東北方約1.5kmには、畑化して湮滅した八幡山古墳があり、人物埴輪・円筒埴輪が出土している。これらの古墳は、ほとんどが古墳時代後期後葉から終末期(6世紀末～7世紀)に築造された。

奈良・平安時代になると、この地域の集落数は急増している。その理由の一つに、水田耕作の基盤が整備されたためと考えられる。8世紀には信濃国分寺・同尼寺が置かれ、東山道も保福寺峠越えで、この谷平野を通っている。『日本霊異記』に登場する「跡目郷」の「他田舎人蝦夷」は、信濃国造につながるものと考えられるが、塚穴古墳や勅旨牧の一つの塩原牧との関係があったと考えられよう。川西地区は、『和名類聚抄』の小県八郷の内の「福田郷」であり、一部分「跡部郷」にも含まれると思われるが、東山道沿いのこの地は中央の文物も入りやすく、当時は開けた土地だったろう。古代末に比定される小泉条里的遺構はその名残であろう。

1990年県営ほ場整備事業小泉地区に伴う高田遺跡発掘調査Ⅰ(調査面積約3,000㎡)では、奈良時代から平安時代の竪穴式住居址47件、土壇22基、溝址7条、掘立柱建物址14件が検出された。遺物は、土師器の杯・皿・蓋・甕・甑・甌、須恵器の杯・皿・蓋・壺・甕・瓶・鉢、灰釉陶器の杯、布目痕のある平瓦などが出土している。

1993年共同住宅建設に伴う高田遺跡発掘調査Ⅱ(調査面積約920㎡)は、1990年の発掘調査地より西へ約90mに位置し、一連の遺跡と考えられ、奈良時代から平安時代の竪穴住居址4件、土壇4基、溝址4条、ピット71基が検出された。遺物は、土師器の杯・皿、須恵器の杯・皿・蓋などが検出され、溝址からは86点に及ぶ縄目と布目を有す平瓦・丸瓦が廃棄され

た状態で出土したのが注目される。

第3節 遺跡の基本層序

『土層柱状図』

I	0cm	I層	耕作土
II	15	II層	灰黄色・重埴土
III	25	III層	浅黄色・重埴土
IV	39	IV層	明黄褐色・シル質埴土
V	53	V層	暗灰黄色・軽埴土(遺構検出面GL-53cm)
V			

第三章 調査の結果

第1節 概要

今回確認された遺構は、竪穴住居跡2軒・掘立柱建物跡2棟・溝跡5条・土壇4基・ピット31基である。

1 竪穴住居跡

竪穴住居跡は2軒検出されたが、いずれも北側が調査区域外となったため、一部のみの調査となった。遺物の出土は非常に少なかった。

SB-01は、西壁中央部から南壁を経て東壁中央部まで周溝がめぐる。P1・2が、主柱穴と思われる。火処は確認されなかった。遺物は、3点図示した。その所産期は、平安時代前期と考えられる。

SB-02は、南西隅以外は調査区域外となった。遺物は、1点図示した。

2 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は2棟検出された。

ST-01は、北西側を攪乱により失っていた。このため、規模等は不明である。遺物は1点図示した。

ST-02は、北側が調査区域外となった。規模等は不明であるが、SB-01を切っている。これは、第1次調査でも、数箇所です竪穴住居を掘立柱建物が切っているため、関連性が想起される。

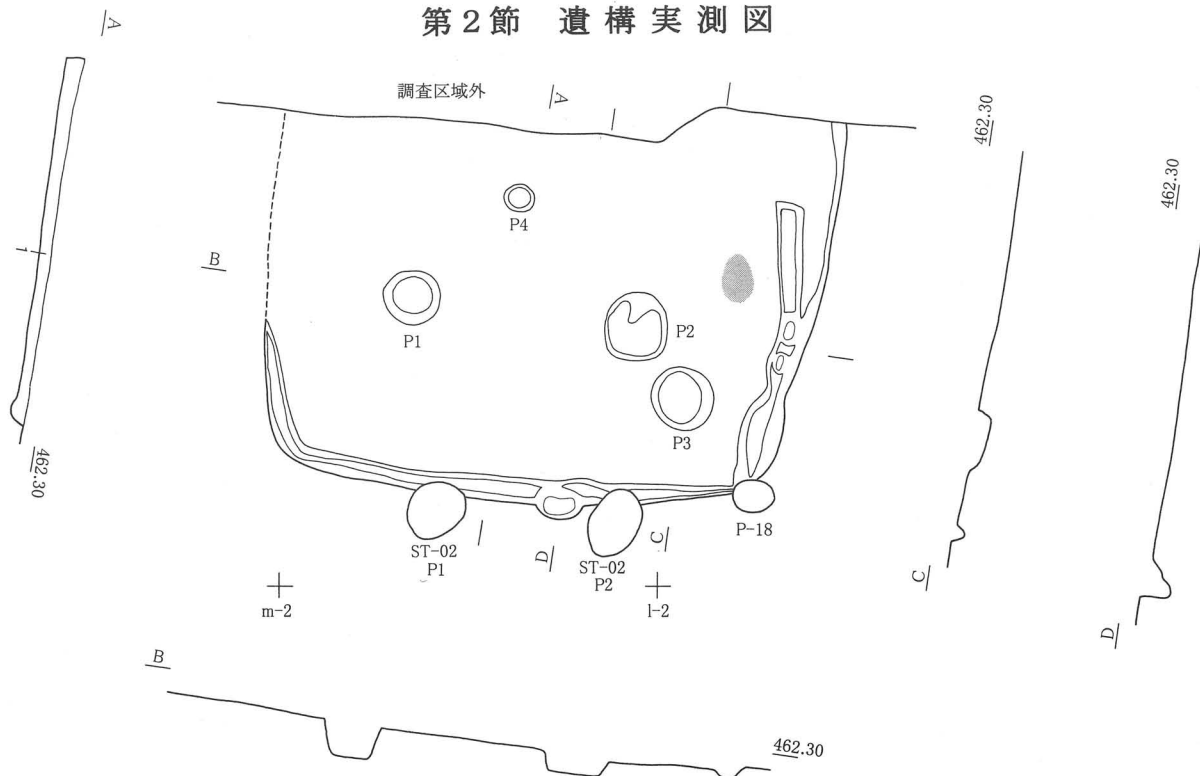
3 その他の遺構

溝跡は5条確認されたが、いずれも自然遺構と思われる。

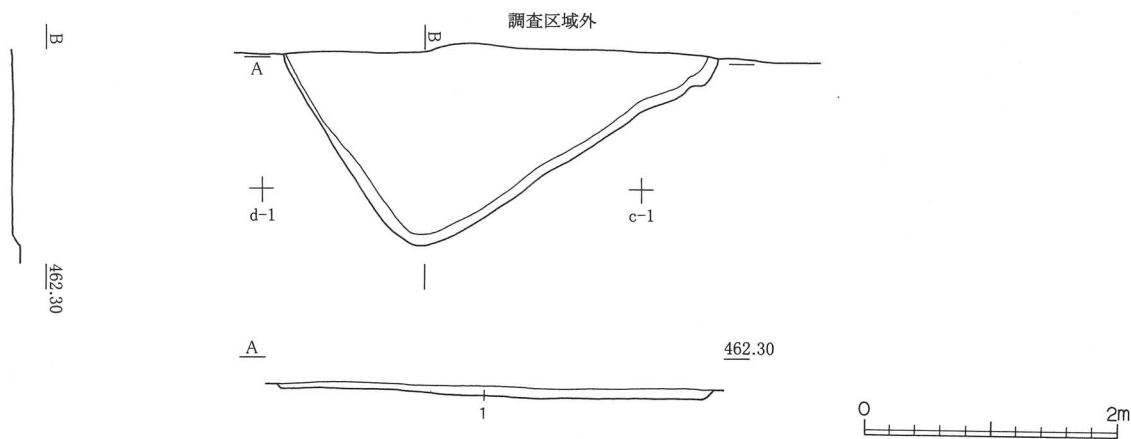
土壇は4基、ピットは31基検出されているが、配置や規格性に乏しく、個々の遺構の性格は不明である。なお、P-01から出土した土師器は、甑として報告した。しかし、初見の土器であるため類例の増加に期待したい。

これまで、第1～3次まで高田遺跡は調査が行われているが、今回の調査が遺構・遺物とも最も少ない出土であった。このような状況から、今回の調査範囲は高田遺跡南側の縁辺部に相当すると考えられる。

第2節 遺構実測図

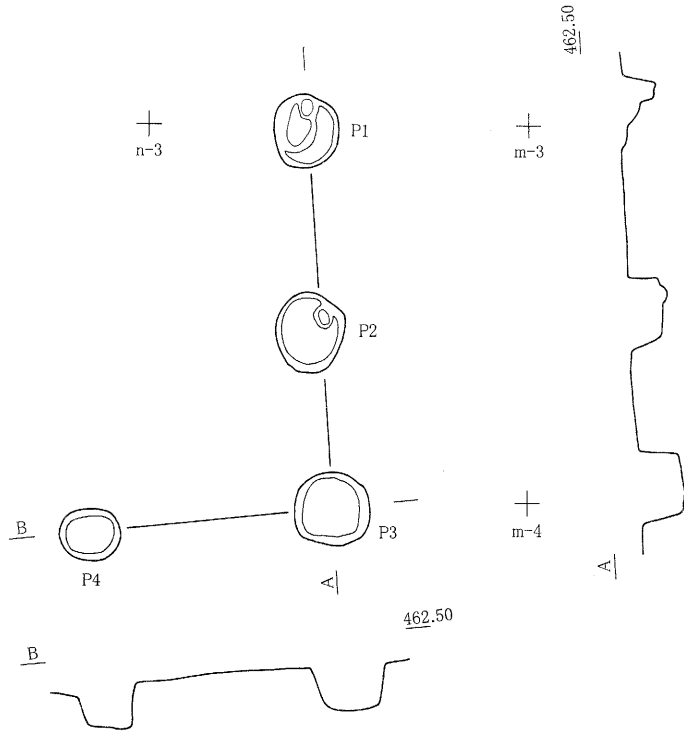


第1号竪穴住居跡

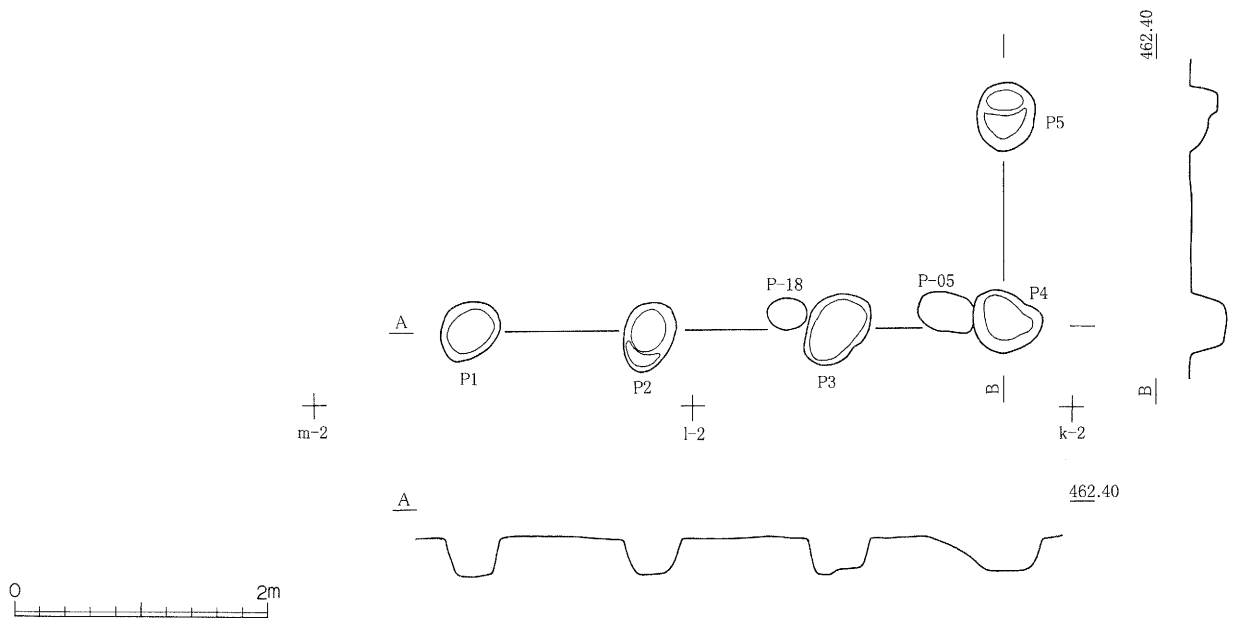


第2号竪穴住居跡

遺構	SB-01	形態	隅丸長方形	壁高	(E)0.15	炉	位置	不明
		方位	N-15° -W	床高	462.02~462.12		規模	不明
位置(グリット番号)	k0, k-1, l0, l-1	規模	440×?	床面積	不明		深さ	不明
柱穴	P1(0.44×0.43×0.28) P2(0.53×0.50×0.16) P3(0.50×0.50×0.14) P4(0.20×0.20×0.10)							
備考	住居跡北側は調査区域外のため不明。ST-02に切られている。焼土(0.40×0.22)が検出された。住居の回りに周溝を巡らしている。覆土は、10YR5/1褐灰色・粘質土である。							
遺構	SB-02	形態	不明	壁高	(SE)0.05~(SW)0.04	炉	位置	不明
		方位	N-58° -E	床高	462.00~462.04		規模	不明
位置(グリット番号)	B0, C0, C1	規模	不明	床面積	不明		深さ	不明
備考	住居跡北側は、調査区域外のため不明。覆土は、10YR5/1褐灰色・粘質土である。							

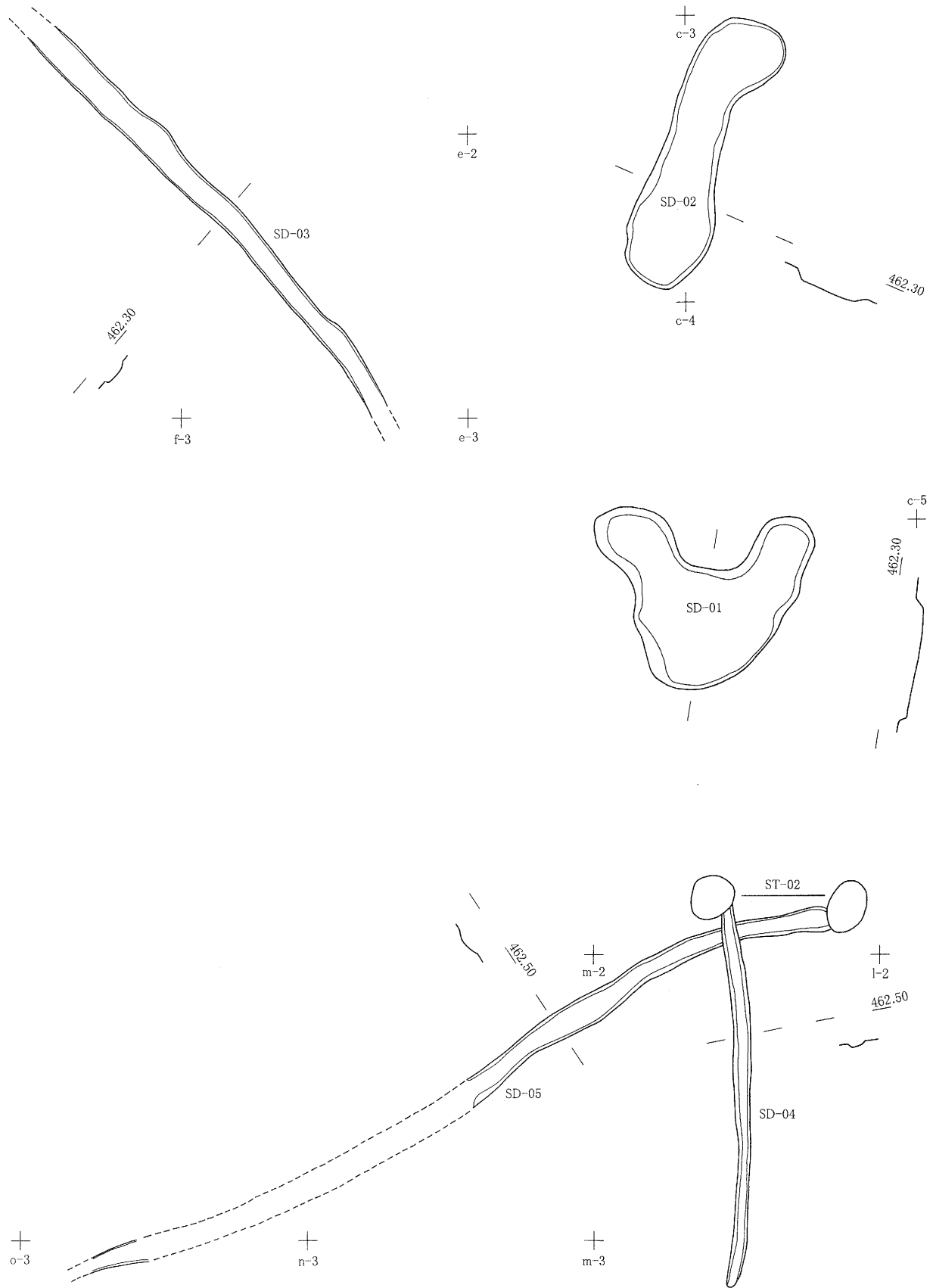


第1号掘立柱建物跡

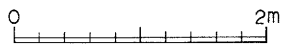
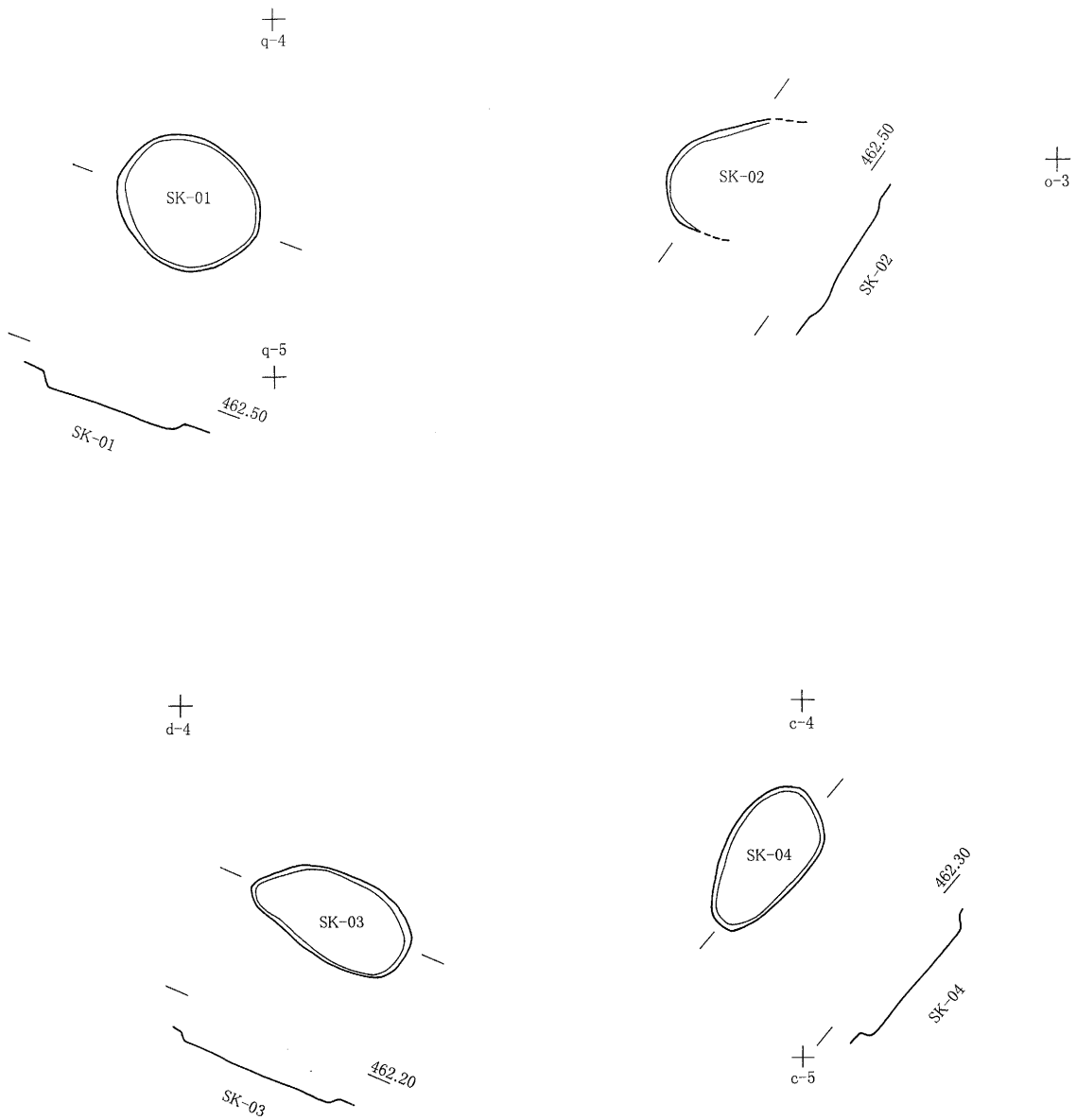


第2号掘立柱建物跡

遺構実測図					第1号掘立柱建物跡					遺構実測図					第2号掘立柱建物跡				
位置(グリッド番号)					M-2, M-3, M-4, N-2, N-3, N-4					位置(グリッド番号)					K-1, K-2, L-1, L-2				
主軸方向					N-4° -W					主軸方向					N				
柱穴	長径	短径	深さ	南北柱間	150					柱穴	長径	短径	深さ	南北柱間	160				
P-1	60	50	32	東西柱間	195					P-1	53	43	32	東西柱間	143				
P-2	64	55	32	標高	462.25~462.30					P-2	56	41	27	標高	462.12~462.20				
P-3	60	58	33	備考	西側攪乱されている					P-3	62	48	28	備考	北側調査区域外				
P-4	48	40	33							P-4	56	46	26						
										P-5	53	46	22						

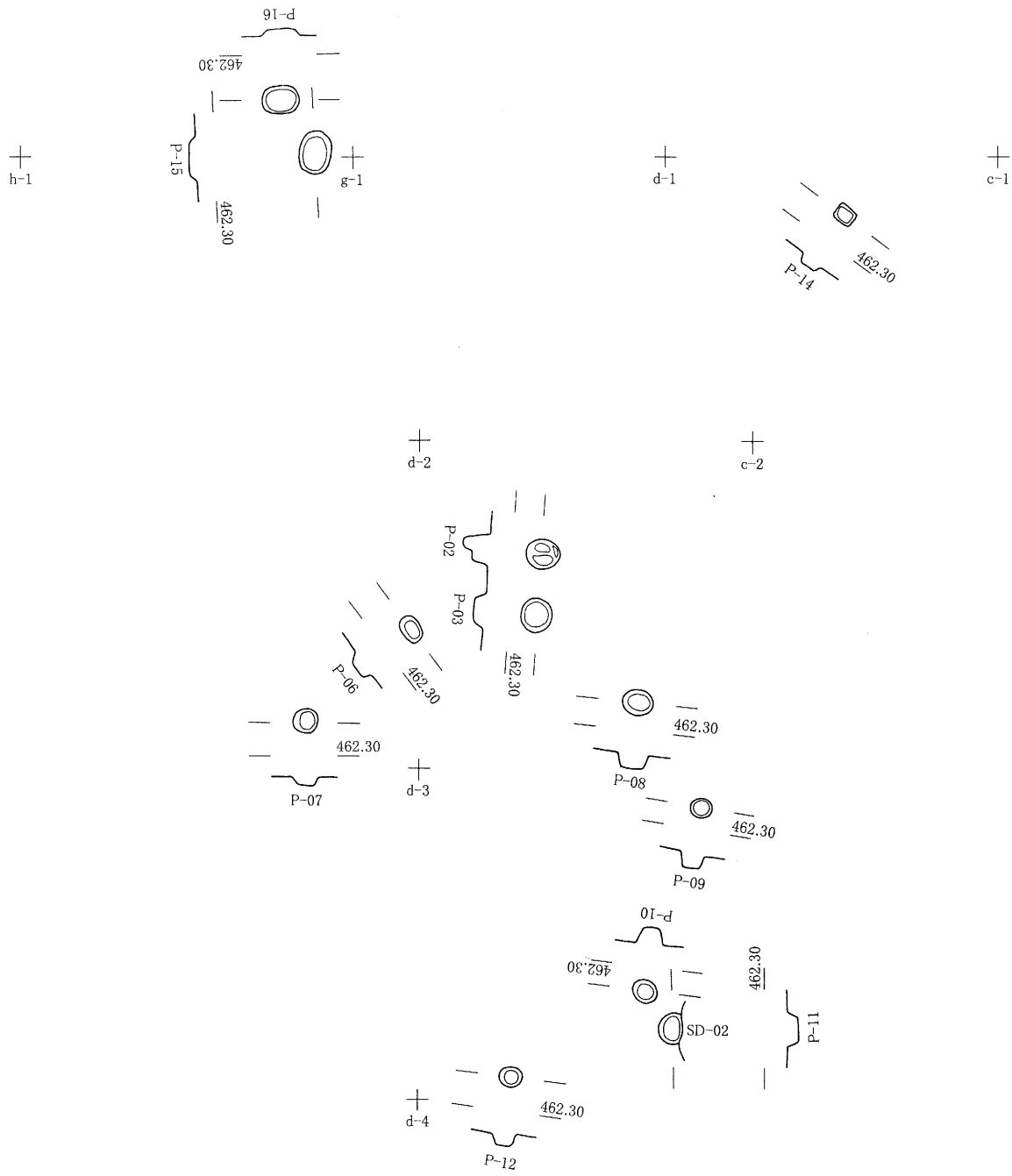


< 溝跡実測図 >

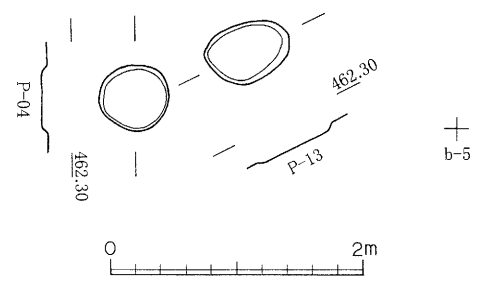


< 土壤実測図 >

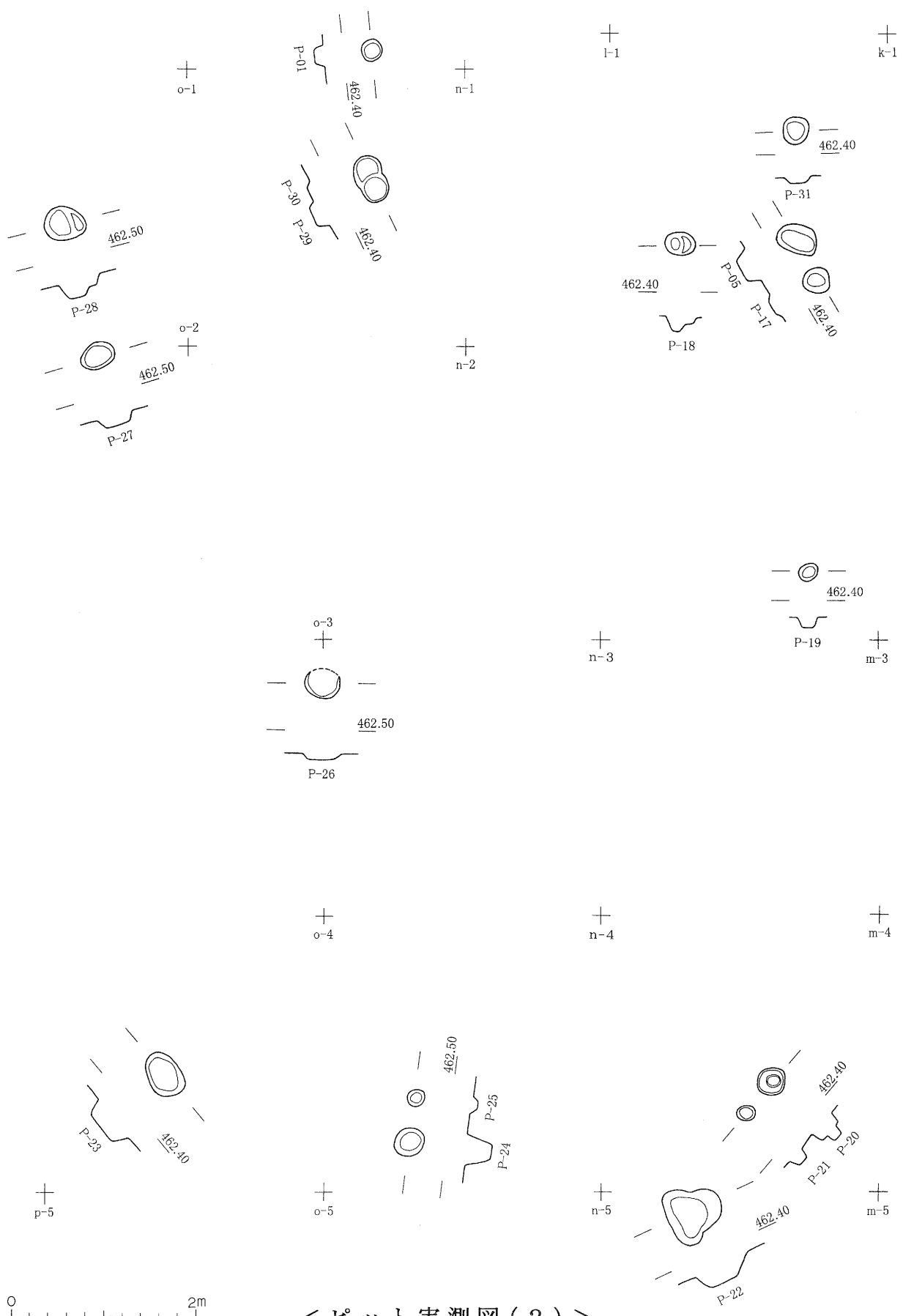
土壤 番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備 考
1	125	110	14	
2	?	100	6	焼土(48×45)
3	140	74	8	
4	130	72	10	



ピット 番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	ピット 番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	ピット 番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm
1	13	12	12	12	20	16	12	23	50	38	18
2	30	28	23	13	68	44	5	24	33	30	27
3	30	26	9	14	15	13	8	25	18	18	7
4	53	52	6	15	40	28	6	26	40	30	8
5	42	29	16	16	34	24	5	27	35	26	13
6	23	16	10	17	28	29	5	28	43	36	22
7	22	22	8	18	32	25	19	29	28	29	12
8	28	22	13	19	22	17	10	30	32	(30)	7
9	20	16	13	20	29	28	26	31	29	28	6
10	22	20	14	21	20	15	12				
11	28	(23)	9	22	62	60	22				

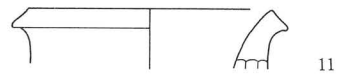
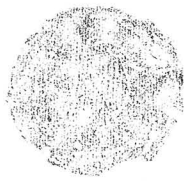
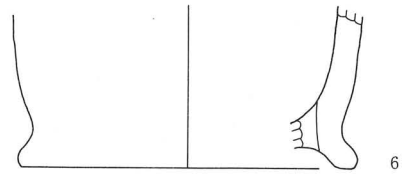
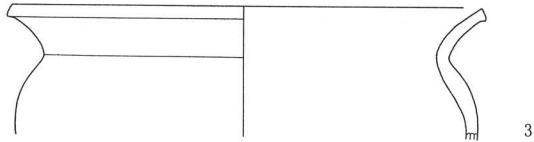
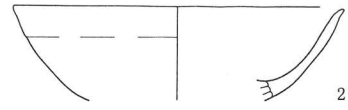
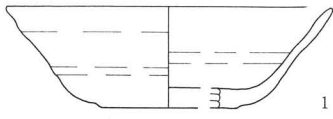


<ピット実測図(1)>



<ピット実測図(2)>

第3節 遺物実測図



遺構 No. 図版 No.	器種 種類	法 量	器 質	成形・形態・文様ほか	整形 ほか
1号 竪穴住居跡 (1)	坏 須恵	13.0 4.0 5.0 1/5	胎;石英・礫・粗砂粒含む 焼;良好 色;(外)N5/灰 (内)N5/灰	平底より外傾して立ち上 がり口縁部開く	(外)轆轤による撫で (内)轆轤による撫で
1号 竪穴住居跡 (2)	坏 須恵	13.0 3.7 — 口縁部1/6	胎;石英・礫・粗砂粒含む 焼;良好 色;(外)N5/灰 (内)N5/灰	口縁部開く	(外)轆轤による撫で (内)轆轤による撫で
1号 竪穴住居跡 (3)	甕 須恵	18.8 5.2 — 口縁部一部	胎;石英・礫・粗砂粒含む 焼;良好 色;(外)N5/灰 (内)10YR6/3 にぶい黄橙	口縁部外反する 口唇部面取りを施す	(外)轆轤による撫で (内)轆轤による撫で
2号 竪穴住居跡 (4)	坏 須恵	— 1.1 5.7 底部のみ	胎;石英・黒雲母・礫・粗砂粒含む 焼;不良 色;(外)2.5Y7/2 灰黄 (内)2.5Y7/1 灰白	平底	(外)撫で (内)撫で
1号 掘立柱建物跡 (5)	坏 須恵	— 2.3 6.0 口縁部1/5	胎;礫・粗砂粒含む 焼;良好 色;(外)N4/灰 (内)N5/灰	平底	(外)轆轤による撫で (内)轆轤による撫で
1号ピット (6)	甔? 土師	— 6.4 13.0 底部一部	胎;石英・礫・粗砂粒含む 焼;良好 色;(外)7.5YR6/6 橙 (内)10YR7/3 にぶい黄橙	底部	(外)撫で (内)撫で
5号ピット (7)	坏 須恵	— 2.0 5.4 底部1/4	胎;石英・礫・粗砂粒含む 焼;良好 色;(外)10YR5/1 褐灰 (内)10YR5/1 褐灰	平底	(外)轆轤による撫で (内)轆轤による撫で
遺構外 (8)	坏 須恵	— 1.1 7.0 底部のみ	胎;礫・粗砂粒含む 焼;良好 色;(外)N7/灰白 (内)N7/灰白	平底	(外)轆轤による撫で 底部回転縁切り (内)轆轤による撫で
遺構外 (9)	坏 須恵	— 1.8 9.2 底部1/4	胎;石英・礫・微砂粒含む 焼;良好 色;(外)10Y6/1 灰 (内)10Y6/1 灰	付高台	(外)轆轤による撫で (内)轆轤による撫で
遺構外 (10)	蓋 須恵	— 1.9 — 抓部	胎;礫・粗砂粒含む 焼;良好 色;(外)N5/灰 (内)N6/灰	宝珠状の抓みを持つ	(外)轆轤による撫で (内)轆轤による撫で
遺構外 (11)	短頸 壺 須恵	9.6 2.3 — 口縁部一部	胎;礫・粗砂粒含む 焼;良好 色;(外)N6/灰 (内)7.5Y6/1 灰	口唇部面取りを施す	(外)轆轤による撫で (内)轆轤による撫で

遺物観察表

<写真図版>



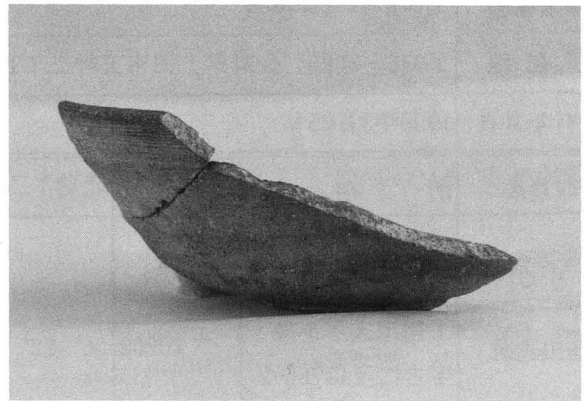
全景(東から)



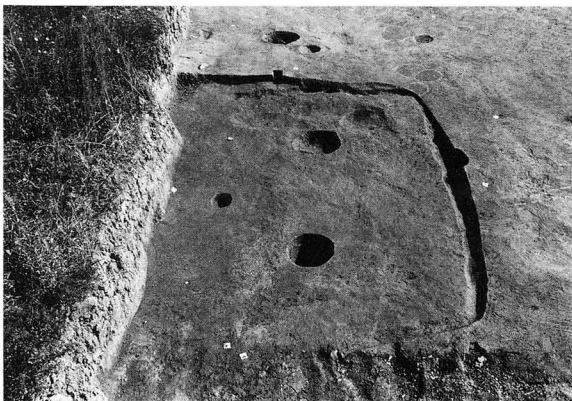
ST-02(南から)



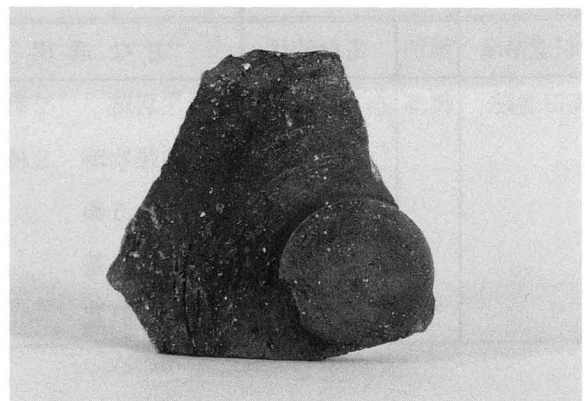
全景(北西から)



坏



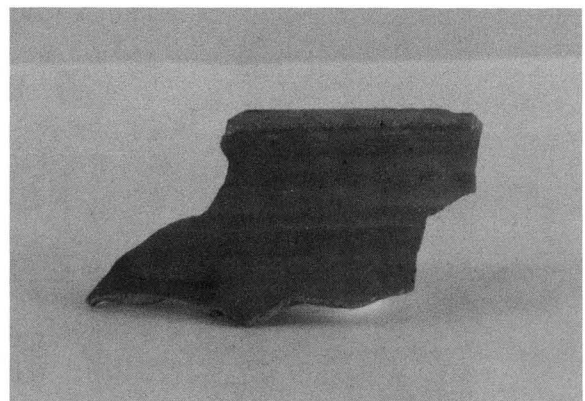
SB-01(西から)



蓋



SB-02(南から)



短頸壺

報 告 書 抄 録

ふりがな	たかだいせき						
書 名	高田遺跡						
副 書 名	共同住宅建設に伴う第3次高田遺跡緊急発掘調査報告書						
シリーズ名	上田市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第79集						
編著者名	西澤和浩・清水 彰						
編集機関	上田市教育委員会						
所 在 地	〒386-0025 長野県上田市天神二丁目4番74号 (TEL)0268-23-5102 (FAX)0268-23-3745						
発行年月日	1999年3月25日						
所収遺跡名	所 在 地	市町村コード	北緯° ' "	東経° ' "	調 査 期 間	調査面積	調 査 原 因
高田遺跡	上田市大字小泉 あぶ 古仁反田766-2	20203	36° 22' 54"	138° 11' 26"	1998年11月4日～ 1998年11月16日	約750㎡	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項
高田遺跡	集落	奈良～ 平安時代	竪穴住居跡 2軒	掘立柱建物跡 2棟	土師器(甑)	須恵器(杯・甕・蓋・短頸壺)	
			溝跡 5条	土壇 4基			
			ピット 31基				

上田市文化財調査報告書 第79集

高 田 遺 跡 III

共同住宅建設に伴う第3次高田遺跡
緊急発掘調査報告書

発行 平成11年3月25日
上田市教育委員会
印刷 有限会社 伸和印刷